

実現す。(ナホトカ港より興安

丸にて)

昭和三十九年 藤山政治大学院修了す。

庄司さんは帰国後結婚されて三人のお子さんに恵まれました。三人共それぞれ独立生計されておりますので、現在は夫婦二人で余生を送っております。

氏は室蘭支部の事務局長として会の発展及び慰藉事業等に積極的にとり組んでおられます。

(北海道 森 英一)

## 戦争の悪夢と過ごした七年間

北海道 村岡 務

五族(日本人、朝鮮人、満人、漢民族、蒙古民族)

協和の皇道楽土のためにと「白蘭の歌」、「支那の夜」、「蘇州夜曲」、「上海の花売り娘」等大陸への憧れを誘うような映画や歌が毎日街中を賑やかにしていた。

広漠とした大平原の彼方に真赤な太陽が沈む美しい大陸は冒険心旺盛な私の心を揺さぶり、その魅力に引き付けられたのは昭和十六年、十五歳の春であった。

職業安定所(旭川市二条十二丁目)で満州に行つて働きたいと申し込みをしたところ、四月中旬に採用通知と共に旅費が支給となり、我が家に跳んで帰つて母にその旨話をする。「そんな遠くへなぜ行くの」と泣かれたが、心はすでに満州大陸への夢と希望に満ちていた。五月一日に涙を流している母を駅のプラットホームに残し、隣組や国防婦人会の人々の見送りを後に美瑛を一人旅立った。

茨城県友部村の満州鑛工義勇軍訓練所に入所。所属は、満州自動車製造株式会社技術員養成所の第一期生として全国から集まった四十五人が同じ会社の所属であった。北海道からは私一人であることに少し心細い気もしたが、強気で頑張ろうと決意を新たにしました。

訓練所には約三千人の少年たちがそれぞれの会社別に部隊編成されていたが、私達は少数グループの集まりであった。多い所では満鉄の一千人、鑛工業関係五

百人、満州飛行機株式会社二百人、その他いろいろな会社があった。訓練所の所長は元日本航空隊創設者の長澤少将という人で、飛行機事故で右手を怪我したとすることで挙手の敬礼も左手でしていた。小さい身体ながら声の大きい人であった。毎日の訓練は、木の根を掘り起こして田畑を作ったり何キロも駆け足をしたりで開拓精神の教育であった。旭川では見たことのない霞ヶ浦航空隊の練習機が毎日青空を飛んでいた。

そんな生活の中で心に残っていることと言えば、日輪兵舎（浴場）で風呂のお湯を沸かすのに古い下駄を燃やしているところを所長に見つかり、「火は清くて尊いものである。そこに便所にはいて行く不浄な下駄を燃やすとは何事だ」と叱られ、心の潔癖さということを教えられたように思った。

訓練期間中満州自動車から派遣されていた藤堂さんはとても温厚な人でよく我々のことを世話してくれたが、今はどうしていらっしゃるだろうか？

約一カ月の訓練が終わって、友部―東京―神戸と汽車に乗って、三宮の港で「ねっか丸」と言う一万トン

級の船に乗って翌日門司に到着した。

その間に二人が満州行きをやめて四十三人になったが、新たに広瀬先生が加わった。若くて美男子でどことなく品があったので好きになった。これからこの先生とずうっと一緒なのかと思うと何となく心強い気持ちがあった。港には多数の人が見送りに来ていた。考えてみると九州・四国・山口・広島方面から来ている人が大半のようだった。家族に見送られてドラの音が鳴り響くと万歳の声とさよならの声、そして別れのテープ。何かと淋しい気持ちで眺めているうちに、あちらでもこちらでも泣いている姿が見える。私には見送る人のいない淋しさも手伝ってか涙がぼろぼろと流れた。玄界灘の波は静かで船酔いもせず、満州の汽車に乗って奉天へ、さらに乗り換えて安東へと南下した。

昭和十六年六月十一日、到着した安東は朝鮮と河を境にしている街で、春五月には桜も咲くという所。気候も北海道と変わらないが、旭川と違って雪は降らない所だった。安東には独身寮と建設中の社員クラブを含め三棟、他には何もなかったが、会社の人から膨大

なスケールで会社と共に地域の工業都市計画があることとの説明を聞いて、新たに大きな希望に胸がふくらむ思いがした。説明の最後に、建設の始まる来年春まで奉天の満州飛行機株式会社の訓練所に行くことを知らされた。

奉天は街も大きく、駅前も広く、人力車や馬車がたぐさん走っていた。奉天での生活は、午前中は勉強、午後は初めて見る鉄を削って造る工作機械が学校の体育館くらい広い所にいっぱい並んでおり、削ったり切ったり穴を開けたりしていた。田舎者の私には珍しさとともに驚きもしたが、その技術の基礎から教えられることとなった。

飛行場では毎日零戦という戦闘機の試験飛行が行われていた。ある朝、飛行場を通して訓練所に行く途中で二〜三歳位の子供が頭を割られて死んでいた。帰りに見ると犬やカラスに食べられて骨だけになっていた。二日目位になるとその骨もなくなっていた。これが満州かと思うと何か恐ろしい気もした。日曜日に友達と野原に行くと満人の墓があった。満州はまだ土葬であっ

たので、古い土葬に野犬が五〜六匹群がり死体を引き出して食っているのを見た。手や足がバラバラになって犬が取り合っていた。時には人間も襲うと聞いていたので皆で逃げて帰ったこともあった。

楽しかったのは兎狩りをした時だ。全生徒が木銃を持ち、輪になって追い込んでいくと草むらから兎が飛び出してくる。輪が段々小さくなってくと一カ所だけネットを張っている所に逃げて来て、ネットにひっかかると足を折って捕らえてしまう。捕れる時は十二〜十五匹も捕れた。その晩は兎の肉御飯が出されて大喜びで食べた。本当においしかった。

日曜日には奉天の街へ行って公園を見たり忠霊塔へ行ったりしたが、見るものすべてが珍しく、満州語が解らないので見て歩くだけであった。

そんなある日曜日、街に号外が飛び散っていた。大きな見出しで「大東亜戦争始まる」と書いてあり、中に「日本海軍航空隊は本日未明（昭和十六年十二月八日）真珠湾攻撃を敢行し敵に多大なる損害を与えたり」などと書かれていた。悪夢はその日から始まった。

翌年春に奉天より安東に戻ってみると、工場の建物が出来ており、社宅もたくさん建てられていた。そうして(元)日産自動車の技術者や職員が次々と入って来た。我々も養成所の勉強のほかに、工場に入ってくる機械類の据え付け作業を技術者の手伝いとして行っていた。

その時一枚の銅貨が入っていた。後で聞くと、据え付けられた機械は横浜にあった米国のフォード会社のもので、戦争で没収したものだということであった。今でもその一セント銅貨を記念に持っている。据え付け工事が終わると、研磨機係として五、六種類の機械を割り当てられ研磨工として技術を学ぶことになった。車庫にはドイツ製、フランス製、アメリカ製、イタリヤ製等の素晴らしい乗用車やトラックが十台程あった。この工場では将来こんな素晴らしい車が造れるのか?と思うと、ますます夢も希望も一段と高まる気持ちであった。

昭和十七年頃には軍用トラックの一号車が流れ作業によって完成し、工場横に出されて記念写真をとった。

その頃には満人の作業員も大勢入っていた。養成所の下級生も入ってきて、工場に活気が出てきた。

寮生活ではいろいろな事があった。その一つに、食料倉庫から砂糖を盗んだ者がいるということで舎監より全員竹刀で殴られたり、煙草を吸った下級生から物を取り上げたりいじめたりした者に対して生徒長であった私が注意したことが悪い、同級生の裏切りだと全員に空室に呼び出されて次から次に殴られて、顔が腫れて会社に行けず、舎監に見つからないように自分一人で顔を冷やしたこともあった。また、浪東区の派出所へ満人農家から西瓜等を盗んで捕まった者を引き取りに行ってきたこともあった。

当時は戦争のため食糧事情も悪くなった。一食分の御飯を盛る型があつて、一杯が一食分であつた。それも毎日大豆御飯で、一食分の御飯に大豆が二〇〜三〇粒ぐらい入っていて米粒はひと握りぐらいしかなかった。十七〜十八歳の伸び盛りの少年では腹がすくのも当然だった。ある時友人と洗面器にいっぱいの水を飲んだらそれと同じだけ落花生を買うという賭事をして、

その水を全部飲んだ者が翌日腹痛を起こし会社を休んだ者もいた。また、近くに沼がたくさんあって、そこへ行くと沼の底の足形の窪んだ所に魚が入っているのを両手で穴にかぶせるようにするとフナのつかみ取りが出来て、二時間も取るとバケツに半分位とれた。それを社宅の職員の所に持って行くと、正月に招待してくれてフナの佃煮を副食に腹一杯御馳走になったりした楽しいこともあった。

昭和二十年の二月に軍隊に入隊することになったので一時帰国することを許可された時、東京で広瀬先生に会い日産自動車の工場を見せてもらい、街で雑炊御飯に味噌汁を食べた(当時、米は配給で御飯は売ってなかった)。休暇の一週間も終わりに安東に帰って、二月六日に会社で初めての入隊者ということで会社の人達五(五)六人と女性二人が見送りにきてくれた。出発は夜十時頃で、会社に帰るのに十六キロぐらい離れていて、バスも何もないのに駅からどうするのかと彼女達は心配してくれた。発車のベルが鳴った時に女性の方達から「頑張ってきて」「元気で帰ってきて」と口々

に言いながら握手をしてきた。初めて女性の手の柔らかさとぬくもりを感じた。

考えてみると、当時は女性と話をしたりすることは女々しいということで女性とは挨拶もしたことがなかった。二十歳になって初めて女性の手を握ったなんて今では考えられぬことだ。

入隊後、礼状の印刷代も女性の方が支払ってくれたと聞いた。一体どの人が支払ってくれたのか顔も名前も知らず、お礼のことばもないまま今日に至っているが、もし元気で帰国していたら一度会ってお礼を言いたいと今でも考えている。終戦後のことで生死も住所も分からないが、どうか元気で幸福に暮らしておられることを祈っている。

軍隊はハルピンの満州独立六二二部隊、馬で弾薬や食糧を輸送する部隊だ。毎日が馬の世話と乗馬、けん引の訓練。馬は兵隊よりも大切で、怪我でもさせたら夜も寝ずに看病し、そのうえ班長には殴られ上官には叱られて苦しい二等兵であった。六月に下士官候補ということまで一等兵に進級した。その頃になると弾薬

を抱えて戦車の下に飛び込む訓練で、「貴様一人死んでも戦車一台を破壊する事が出来れば国のため天皇陛下のため立派な名譽の戦死だ」と言われて、その気になって一所懸命訓練に励んだ。

ところが昭和二十年八月十三日の夜中に非常呼集がかかった。「一装用着用」との命令で貴重品を持ち外出用の服装をして広場に集合した。部隊長から「ソ連軍の侵入にそなえ陣地構築をハルビン市内にて行う」との訓示を受け、ハルビン市内に行くと、街中は臨戦体制のため女性は鉢巻きにモンペ姿で竹槍を持って集結していた。十五日早朝に対戦変更命令が出て汽車に乗って出発した。奉天駅に着くと民間人が列車に乗るのに押し合いへし合いで、デッキにつかまっている者もいる。話を聞くと、天皇陛下が戦争終結の詔書を布告されたとのことで日本に引き揚げるのだということだった。その時に初めて戦争に負けたことのない日本が敗戦したことを知った。

敗戦によって我々はどうなるのか、どうすればいいのかわからぬまま、奉天に女、子供、老人を残して我々

は安東に向かった。汽車が停まった駅は平壤（北朝鮮）であった。川をはさんで次の駅は京城（南朝鮮）であるが、部隊長の話では後続の汽車に我が部隊の半分がいるので到着次第全員そろって南朝鮮に下るとのことであった。その日は後続部隊は到着せず山中の河原で野宿することになり、川の向こう岸が崖になっている所へ兵器、弾薬を隠した。

翌朝九時頃に自動小銃を持って馬に乗ったソ連軍兵士が来て部隊長及び幹部を集め朝鮮人らしい通訳を通して兵器を全部集めて出し、(二兀) 日本人学校に入ること命じられて夕方までに全員学校の教室に入った。我々は武装解除されてしまった。そうして夜になっても寝られぬままに窓から見える夜景を見てみると、近くの空き家に日本人女性が三人位うす暗い所に身を寄せ合っているのが見えた。しばらくすると朝鮮の自警団（終戦と同時に出来た）がその家に入って行き懐中電灯で家の中を調べていたが、三人の女性達も見つかってしまった。持ち物をとりあげて最後に身体も奪った。これを見て我々は何もしてやれなかった。学校の周り

はソ連軍の兵隊で見張られている。日本男子とか大和魂があるとか言っていたが、その女性達も守ることが出来ない情けない人間になってしまったのかと自分ながら嫌気がした。誰か一人でもこの状況を見たら死を承知の上で助けるのが日本男子であり、大和魂の持ち主ではないか？と思うと、敗戦によって日本人もその辺のみすばらしい浮浪者と同じだと思った。

翌朝八時頃に全員の私物は校庭に集められた。親の写真、妻子の写真、手帳、日の丸、千人針（多数の女の人が一針一針赤い結び玉を縫いつけてくれた腹巻）等全部燃やされてしまった。この時は今までの人生も心も全部燃やしてしまって空洞の間人間になったように思った。午後には街から離れた山中の元日本軍の兵舎に全員入るよう命ぜられた。その時は牧場の追われる羊が先を競って入るみたいに必死であった。道幅の何倍にも広がった群れは他人を押しつけて我先にと急いだ。夕方五時までに入らない者は全員銃殺するということで、ソ連軍が自動小銃をバラバラ・バラバラと撃ちながら両側を馬に乗って走っていた。命が危ないとなる

と上官も階級もなかった。僕は日本男子らしく正々堂々と隊列組んで行くものだと思っていた。それが日本人であり日本の軍隊だと思っていたことが完全に失われてしまった。それなら自分も何とか生き延びて、いつかは故郷に帰らねばならないと覚悟を決めた。

食糧の配給もないので、生きるために同僚と組んで草の根をとってきては炊いて食べたり、または湯を沸かして飲みながらダシコ（小魚）を三匹ずつ分けて食べた日も何日か続いた。他の者はネズミ、カエルを焼いて食べたり、馬が衰弱して倒れているのを殺して皮をはいでその肉を焼いて食べている者もいた。衰弱して病気になる者もいた。

十日程過ぎて、午後八時頃暗くなってトラックで運び込まれた食糧の荷降ろしに何人かが呼ばれた。暗がりの中、友人がトラックから担いで来たものを上着を脱いでくるみ、横流しで受け取り自分の宿舍の床下に隠した。翌朝食べようと思ったら牛の頭であった。また便所は、人数が多くしかも下痢をしている者が多いこともあって一日でいっぱいになるので、毎日車に使

槽を乗せて運び出して捨ててくる。途中、朝鮮の子供達が大勢寄って来てたばこを売っていた。ソ連の兵隊に追われると逃げるが、兵隊が列の前の方に行けば後ろの方に売りにくる、後ろにくれば前の方にくる。百円で二十本入り二十箱売ってくれた。そんなある日、友人に頼まれてたばこを買ってやることになったが、子供達は着るくて十箱くれたが残りはいないので金を払わなかった。そのうちソ連の兵隊が追い払ってしまふ。兵隊がいない時でもたばこをよこさず金だけ取って逃げてしまうこともあった。私達が追い掛けていくと逃亡したと思われて撃たれる。それを子供達は知っていてごまかそうとするのだ。午後からもまた、たばこ二十箱を買ってきて、頼まれた人たちに渡したが、午前中に子供から受け取った十個が余っていて、たばこは吸わない私には必要のないものだったので、兵舎内でたばこを賭けて花札をしているグループに仲間に入れてもらって花札をしたところ、勝って勝って勝ちまくるといふ感じで雑囊カバンにいっぱいになってしまった。仲のよい戦友達に分けてやったが、カバンに

はまだ半分位残っていた。捕虜になってから毎日何もしないし食べるものもない日々であったので、戦友のまねをしてたばこを口にしながらたばこを吸うきっかけとなってしまった。

この収容所には三万人くらい入っているとのことで、二カ月くらい過ぎてから毎日使役に連れて行かれて、機械類とか食糧類とかを貨車に積み込む作業でどんどんソ連に送った。食糧倉庫の前のソ連の兵隊が監視している所に日本女性二人が食べ物をもらいに来てしばらく話をしていたが、倉庫の中に入って行った。我々の作業をしている所に来て黒砂糖を一袋やれと言われて渡したが、女性は顔を隠していた。生きるための悲しい姿を見られたくなかったのだろう。どこからか何日もかかって歩いて来たのだろうと思うと、可哀相で胸がしめつけられる思いで忘れることが出来ない。朝鮮人とソ連人は一生好きになれなくなった。

翌年（昭和二十一年）の六月頃に汽車で平壤を後にして仁川港に着いて、船でポセットという港に着いた。その夜、午後十一時過ぎに日が暮れて午前一時半頃に

は夜が明けて来たので、ここはどこだろうかと何となく不安になってきた。八時頃に貨車に乗せられた。窓もない、便所も戸の所に桶をつけて流し出すようになっていた。一車両を二段にして五十人くらい乗っていた。

朝になると兵隊が来て、人数を調べるついでに時計、万年筆、財布等何でも見つけた物は取り上げてしまう。両腕に時計を三個も四個もして喜んでいた兵隊もいた。それが終わるとパンと水を車内に入れてくれた。

外は全然見えないが毎日走っている。停車するとしばらく走らないようなので臨時列車のようだった。指折り数えて二十二日か二十三日目に貨車から降ろされた。何にも見えない砂漠であった。そこから二、三キロ歩いた所に収容所が見えてきた。よく見ると家の屋根らしいものが所々にあった。後で聞いた話によるとウズベク共和国のベゴワードという所であった。

収容所には三千人くらいの捕虜が入っていた。気候は旭川より暖かく、夜雪が降っても朝九時頃には溶けてしまう。民家は地下に造られていて地上には屋根が所々に小さい山のように見えるだけ、時々ラクダの列

が通って行くのを見ることが出来る。年間通して雪が二、三回降るが雨はほとんど降らなかった。砂漠地帯には所々にトゲのある草と綿のなる草が生えているだけ、木は生えていない。崖の下には河が流れていて、その向こうは緑地帯で水田、畑の農場地帯になっていた。

収容所での生活は朝六時に起床、洗面、食事、八時に発電所の建設作業に出る。十一時三十分に戻って来て十三時に出発、十七時に帰って来て夕食、自由時間、二十一時就寝となっていた。作業は土工、溶接、自動車の運転等が主な作業で、私達は土方作業の方に行った。噂によると技術者はなかなか帰してもらえないというので土方をすることにしたのだ。三十六<sup>トナリヤ</sup>籽の水路と発電所の建設工事で、満州で一番大きい発電所を解体して持ってきた発電機だということだった。

門を出る時は五列にならなければソ連の兵隊達は数えられないらしく、四、五回数え直しをしなければわからないらかった。四列では計算出来ないといった教育程度で、日本人よりかなり低い。特にシベリア系

は無学に等しいと感じた。人数の確認が終わると行列の前後に兵隊がついて作業場に行く。そこまでは約一〜二軒くらいであった。

縦×横×高さでその日の土の運んだ量を出してその班の作業量をパーセントで出す。一日中一所懸命運んでも八五〜九〇%にしかならなかったが、馴れて来ると要領が良くなって、計る所だけ深く掘って作業量を増し、一日一〇〇〜一二〇%の成績をあげるようになった。パーセントを上げる事によって食事の量も増やしてもらえる。

一〇〇%の作業をすると黒パン一人分、厚さ約一〇センチくらい、おじや（おかゆ）、青トマトの漬物、塩漬けの鮭等の小間切れの入った物が飯盒（軍隊の弁当箱）一杯もらえた。八〇〜九〇%は黒パン厚さ五センチくらい、おじやが上の目盛りまで。八〇%以下だと黒パン三センチくらい、おじやが下の目盛りまでなど、作業量によって食事の量が変わった。共産主義は「働かざる者食うべからず」という考え方である。ただし一二〇%以上働くとお金をくれるということであっ

たが、各班が競争して一〇〇%の能率を上げるとノルマをさらに高くして、いくら努力してもなかなか一〇〇%以上にならないようにした。その点技術者は能率が良く、毎月十〜二十ルーブルのお金をもらって煙草やパンを買って食べていたようだ。

夕方五時に収容所に帰り六時には夕食が出る。夕食の時には飯盒のふたに煮物等のおかずがついていた。食事が終わると自由時間で九時には寝ることになっていた。二段式板の間のワラ布団に毛布を敷き掛け毛布をかぶって寝るのだが、南京虫がどこからともなく出てきて身体のおちらこちらに食いつき、かゆくて眠れぬ夜が毎日のように続いた。そんな時に限って故郷のことを思い出し、母を想い涙を流したこともずいぶんあった。時には銃声の音に飛び起きて見に行くと、逃亡者がいて銃殺されたということもあった。また、作業中に土塊の下敷きになって死んだり病気になって亡くなる者もいた。病気になっても、怪我の場合は休ませてもらえるが痛風とか神経痛等の目に見えない病気の時はいままでしてくれない。そんな時は現場で休ませて

班の者がその分も働かなければパーセントが悪くなるので大変であった。結局病人は良くならず、どうにもならなくなってきたからどこかに連れて行ってしまおう。あの人はどうなったのだろうか？

そんな生活の中でも楽しいこともあった。大勢の中には器用な人もいて楽器、太鼓、ラッパ等を作り楽団を編成して労働歌を演奏してくれたり、一週間に一度盃に半分くらい砂糖の配給があったり、煙草を少しではあったが支給してくれた。日曜日は共産主義の教育があったり労働歌の練習があったり、南京虫退治の日もあった。マルクスの教える共産主義で感じたことは、健康で真面目に働けば食うことに心配はなく、能力があれば国費で大学にも行ける。大学生でも日本の管理職クラス（係長、課長）の給料が手当としてもらえるということだった。

技術、特技が他の者より優れていれば偉くもなれるが、常にレーニンのバッジをつけている党員（ヤーパーティGPUの特務要員）が日常生活や作業状況等を監視している。仕事も腰をかけて休むとサボっていると言われるので

腰をかけて話をすることは出来ない。見ているとソ連人は一日ぶらぶらと動いているといった感じであった。日本人のように汗を流してぱっとやって一服するということはない。腰を下ろして休むと仕事をサボっていると見られるからだ。労働者がいくら一所懸命いても平等の精神から他人より多く金を持つことは出来ない。引越し風景を見ると、衣服は作業着と外出用の二着くらい、鍋（フライパン）等一〜二個、食器も一人一〜二皿、それに毛布一〜二枚で、リヤカーに積んでいく程度である。発電所の建設工事の所長でも酒はたまに飲めるくらいである。食事も毎日配給される黒パンぐらいで、なかにはそれでも腹のへる者は黒パンを売って安い粉を買って、団子のようなものをフライパンで焼いて食べている。現場で働いていた労働者は黒パンをかじりながら水を飲んで昼食を済ましている者も大勢いた。そんな労働者の楽しみは土曜の夜に野外で音楽に合わせてダンスを踊ることくらいである。真面目に働き認められた場合は「休養の家」に入れてもらえる。そこでは毎日入浴し、洗濯した服を着

て食事も五、六品の料理がついて、日中は音楽を聞き新聞、雑誌を読みのんびり一週間暮らせた。

農業はコルホーズと言つて集団農場であり、その農場が生産をいくら上げても国家の収入が良くなるだけで、農場に働く人達の生活が良くなることはない。村に一軒のスーパリーのような店があるが、金のある人は食べたり飲んだり出来るが、労働者は黒パンを売つて安い粉を買うくらいである。そんな生活しか出来ないのはソ連の属国だからなのか共産圏の国だからなのか？ そんな生活を見ると、どうしても共産党の考え方に協調する気にはなれなかった。そんな社会に日本人が我慢できるわけではないと思つた。早く日本に帰りたいたいと思ひながら三年間が過ぎて、発電所工事半年近く遅れて完成に近づいた。

昭和二十三年五月に復員命令があると聞かされ、自分分は果たしてその中に含まれているのかと心配していたが、全員だと聞いた時には嬉しさのあまり皆で手を取り合つて泣いた。出発の前夜は全員洗濯した服を渡され、食事も全員一〇〇%以上の量で、煙草も高級の

吸い口付きとバラの巻いて吸う袋入り二個、さらに酒も少し出された。考えてみると、雨の日も風の日も空腹を抱えて重労働に耐えてきた。三年間病氣もせず捕虜生活を過ごすことが出来たことが不思議なくらいだ。帰りの列車は客車で、窓も開放され、草原の美しい眺めと途中の駅で人々が手を振つて見送つてくれた。列車は東へ東へと走る。時々羊の群れも見えた。バイカル湖の美しい景色とシベリアの大森林地帯では丸太の組合わせで建てられている家等が素晴らしい。窓の外を眺めて丸二十幾日走つた列車は、遂に海の見えるナホトカ港に着いた。

翌日からは、床屋で散髪をしてもらい、服も破れた物は取り替え、汚れた物は洗濯した物と取り替えてくれた。シャワーを使いさっぱりした。持ち物は全部取り上げられ何一つなかった。一週間程して港に船が入つて来た。日の丸をなびかせ英彦丸と書いてあった。日の丸を見て嬉しさに涙が出て止まらなかつた。日本人でありながら日の丸をいやがる人達のいることを私は今でも理解することが出来ない。日の丸は戦争の印で

なく、世界でも認められた日本国民の印だと思う。一度外国に行ってみると日の丸が日本人を守ってくれる有難さがわかると思う。

英彦丸に乗り込むと、なぜか母のふところに包まれたような気持ちで安心してぐっすり寝てしまった。誰かの「日本だ、日本だ、日本が見える」と叫ぶ声に甲板に出てみた。遙か彼方に実に美しい緑の島が見えた。だんだん近づくにしたがって心がどきどきして、涙が知らず知らず流れてきて止まらなかった。涙を拭くのも忘れてじっと見つめた。

舞鶴港に着き、復員手続きも終わり九百円の手当をもらった。会社に勤めていた頃は百〇百五十円位の給料だったので大金にびっくりした。だが、長い間甘い物を食べていなかったので羊羹を一本買ったら二百円も取られたので、またびっくりした。眼鏡のツルも壊れひもでつっていたのでツルを買ったら六百円も取られた。残り百円しかなくなりがっかりしてしまった。北海道まで帰るのにどうしようかと思ったが、汽車賃は無料だから空腹でも我慢すればよいと覚悟を決めた。

しかし途中の駅では婦人会や女学生がおにぎりや花一輪ずつくれたので大変助かった。日本に帰って来たらこんなに親切にしてもらえる事に心より感謝の気持ちでいっぱいであった。

静岡に着いたら共産党の人達がノボリ旗を立てて歓迎に来ていたが、捕虜生活の事を思うと腹が立って見る気もしなかった。あんな共産党国のごが良いのか。東京でも自由党や共産党が迎えに来ており、それぞれ党本部に連れていかれたが、私は久しぶりに見る東京を見ようと駅の近くを見て回った。どこも屋台が並んでいて、元の満州の満人街を歩いているように雑然としていた。そこに団子とか蒸しパン、飲物などが並べられていたが、見るからに汚らしく何となくみすばらしく、どの人も痩せこけて目ばかり光っているように思えた。何年か前に見た立派な東京の街はどこへ行ったのだろうか？「リンゴの気持はよく分る」とか「こんな女に誰がした」といった歌がどこからか聞こえていたのが印象的だった。何となく気も沈んで、見るもの聞くものは日本帝国の威厳も整然としたところもな

く、私は昔話の浦島太郎になったような気持ちになつた。

それでも旭川に着いた時は母と兄、義姉に迎えられて、喜びに一瞬言葉も忘れじつと母の顔を見つめていた。母も古い、やつれていたその目に涙が光っていた。兄に声をかけられたが何を言われたか判らぬくらいであった。昭和十六年春に故郷を出てから七年ぶりに帰って、山も河も学校も懐かしい思い出の景色に何か安堵の気持ちになって笑顔を浮かべることが出来た。

軍国主義の八紘一宇、皇道楽土建設等の宣伝の歌や映画に踊らされて、大きな夢と希望に燃えて満州大陸に十六歳で渡り、その年の十二月に大東亜戦争が始まり、昭和二十年八月に終戦、その後三カ年の捕虜生活をして裸で帰って来た私の人生を考えると、この七年間は悪夢の中をさまよっていたとしか考えられない。

あれから五十何年間に過ぎて、満州で別れた何人かの友とも連絡がとれ、お互い無事帰国した喜びを書き残すべく筆をとった。この機会に悪夢の七年間を思い出し、生の声として書き残すべく筆をとった。戦争は

一部の軍国主義者と資本家の貪欲な利益の追求による欺瞞に満ちたものであったと思う。戦争に負けて日本は本当の平和と自由が訪れた。これらは苦い経験を通して得たものであること、平和の尊さは大勢の犠牲者によって得た宝であることを末永く伝えたい。そしてこれらの宝を失うことのないよう祈ってやみません。

#### 【執筆者の紹介】

大正十四年五月十五日 父・松三郎（翌年死亡） 母・

とみの四男として生まれる

（北海道上川郡美瑛町字ルベシ

へ）

昭和七年七月

美瑛尋常高等小学校に入学

昭和十三年四月

美瑛尋常高等小学校高等科に入

学

昭和十五年三月

美瑛尋常高等小学校高等科を卒

業

昭和十五年四月

美瑛町美瑛郵便局に就職

昭和十五年十月

美瑛町美瑛郵便局退職

昭和十六年五月

満州青少年技術生として採用される（茨城県友部村満州鉦工訓練所に入所）

昭和二十一年五月

捕虜となる

昭和十六年六月

満州自動車製造(株)所属となる  
訓練所出発→東京→神戸と列車で三宮へ

昭和二十三年六月

北朝鮮平壤→仁川港より乗船→ソ連ボセット港に上陸→シベリア→ウズベク共和国ベゴワード捕虜収容所に着く  
ベゴワード→タシケント→シベリア→ナホトカー舞鶴→東京→北海道旭川と經由して復員する

三宮より客船（ねつか丸）にて出航、門司→玄界灘を通り満州国大連に上陸→奉天→安東→奉天に到着

昭和二十三年九月

旭新運輸に休職出向する  
国策パルプ入社、旭川工場パルプ抄造課勤務  
業務課製品係、管理課物流係を経る

昭和十七年四月

満州飛行機(株)技術員養成所に委託生として入所

昭和五十五年二月

旭新運輸に休職出向する

昭和十九年三月

奉天→安東に移る（満州自動車製造(株)安東工場技術員養成所）  
養成所三学年を卒業、安東工場技術部所属

平成二年七月

旭新運輸で六十五歳を迎え退職する  
旭新運輸に勤務

昭和二十年二月

会社を休職、満州独立守備隊六二六二部隊に入隊

平成二年八月

旭川市立光陽中学校用務員とし採用される

昭和二十年八月

終戦、北朝鮮平壤にてソ連軍の

平成三年三月

旭川市立光陽中学校を満六十六歳を迎え定年退職

(株)北海道日新旭川駐在員として就職

平成六年一月

(株)北海道日新旭川駐在所閉鎖のため退職

平成六年三月

旭川市二条六丁目ダイヤモンドパーキング(駐車場)に就職

現在に至る

昭和四十六年に結婚し、一男一女に恵まれた。子供はそれぞれ独立している。現在は夫婦二人だけの平穩な生活を送っている。

(北海道 森 英一)

## シベリア抑留回想記

岩手県 崎田 正治

私は、昭和十七年徴集であったが、足の怪我により

昭和十八年徴兵検査を受け、同年十二月歓呼の声に送られ郷里の宮古駅を後に大阪へ出発した。大阪区役所で十日間待機し、下関へ。下関港から輸送船に乗船し釜山港に上陸。すぐ軍用特別列車で満州国西部国境「ノモンハン」近くのイルセ第一〇七師団歩兵第九十連隊(満州第一八一部隊野村隊)に入隊した。入隊二十日後に、内地での足の怪我が寒さのため悪化し、白城子陸軍病院に入院、二カ月後退院し原隊に復帰したところ、部隊の同年兵達一人残らず転属していた。残務兵に聞いたが行き先はわからなかった。私も一カ月後に奉天省四平街の無線通信隊に転属となり、二カ月間教育を受けた後、朝鮮の咸興に転属。一週間後には戦闘もせずに終戦となり、日本帝国は壊滅した。

自動小銃を肩にしたソ連兵の監視のもとで仮收容所(小学校)に收容され、捕虜生活が始まった。それから二十日位過ぎてから、元山港(現在の北朝鮮)から日本に帰すとのことで收容所から元山港まで行軍することになった。

行軍途中に、草むらにしゃがみこんで手を合わせな